

October 19, 2025

しもべである神 イザヤ 42:1-3

42:1 「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの靈を授け、彼は国々にさばきを行う。

42:2 彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。

42:3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すことなく、眞実をもってさばきを執り行う。

一、全能の神

神はどのようなお方でしょう。聖書は第一に、神が世界を創造された「全能」のお方であると教えています。

「創造」という言葉は、創世記 1:1 の「はじめに神が天と地を創造された」をはじめとして、日本語では創世記に 10 回出てきます。ところが、イザヤ書では、その倍の 21 回も使われています。「創造」以外にも「造る」や「形造る」などを含めると、もっと多くなります。イザヤ 40:26-28 には、「あなたがたは目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方はその万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つも漏れるものはない。……あなたは知らないのか。聞いたことがないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造した方。疲れることなく、弱ることなく、その英知は測り知れない」とあって、神が、全知全能のお方、「力あるお方」であると書かれています。

ヘブライ語で「神」は「エル」、または「エロヒム」で、それには「力ある者」という意味があるのです。神が最初にご自

分を現されたのは「エル・シャダイ」（全能の神）というお名前でした（創世記 17:1）。申命記 6:4-9 にこうあります。「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。私が今日あなたに命じるこれらのことばを心にとどめなさい。……これをあなたの家の戸口の柱と門に書き記しなさい。」ユダヤの人たちは、今も、この言葉通り、「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」と書いたものを小さな筒や箱に入れ、それをドアのそばに取り付けています。これを「メズザー」というのですが、その筒や箱には、「シャダイ」（全能者）の最初の「シン」（シ）という文字が刻まれています。神を全能の神として覚えるためです。

私たちクリスチヤンも、「使徒信条」に「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」とあるように、全能の神、力あるお方への信仰を告白します。そして、この力ある神、全能の神を信じることによって、神から之力を受けて、強められるのです。イザヤ 40:31 にこうあります。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。」これは全能の神、力あるお方を信じる私たちの特権です。

二、主である神

次に、聖書は神を「主であるお方」として教えています。

イザヤは預言者として召されるとき、神が天の御座に座つておられる幻を見ました。神は輝く衣をまとつておられ、その衣

の裾が神殿に満ちていました。神殿は、神ご自身が設計し、人々がそれに従って作ったもので、神はそれを聖別されました。神殿は聖なる建物です。しかし、そんな神殿でさえ、神をお入れすることはできない、その衣の裾しか入れられないというのです。このことは、神がどんなに偉大で、無限のお方であるかを表しています。

神の御座近くには「セラフィム」が飛んでいました。彼らは、神の御座近くで仕えることを許されていた御使いですが、彼らでさえ、神の栄光を直接見ることができませんでした。この御使いは六つの翼を持っていましたが、二つの翼で顔をおおい、二つの翼で足をおおっていました。聖なる御使いたちでさえ神の栄光の前で自らを恥じたのです。

御使いたちは、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる」（イザヤ 6:3）と叫んでいました。ラテン語では『Sanctus, Sanctus, Sanctus』、英語では『Holy, Holy, Holy』です。ヘブライ語には、英語の『Holy, Holier, Holiest』のように比較級や最上級がありませんので、より聖いことは、『Holy』を二つ重ね、『Holy, Holy』と言い、最高に聖いことは、『Holy』を三つ重ね、『Holy, Holy, Holy』と言ったのです。神は最も聖なるお方、『The Most Holy』なのです。

この聖なる神は、「万軍の主」と呼ばれています。御使いたちは基本的には、主の軍勢、戦士たちです。神は天に「万の数万倍、千の数千倍」（黙示録 5:11）の軍勢を持っておられます。かつて、アラムの王が預言者エリシャを捕まえるために、騎兵や戦車を送ったとき、エリシャのしもべは、「ああ、ご主人様。どうしたらよいのでしょうか」と言いましたが、エリシャは、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる

者よりも多いのだから」と言って、「どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください」と、しもべのために祈りました。すると、しもべの目が開かれ、神が送られた御使いの軍勢がエリシャを守っているのが見えました（列王記第二 6:15-17）。神は、神の民のために天の軍勢を送って外敵から守ってくださるお方です。

これはアフリカのある小さな村の診療所で働いていた宣教師が実際に体験した話です。彼は、2週間おきに町まで生活物資や診療所で使う薬の買出しに行っていました。町に出て再び村に帰るのに2日かかり、途中、野宿をしなければなりませんでした。この宣教師がいつも決まって町に買出しに行くのを知っていた町のならず者たちが、宣教師を襲って、金品を奪おうとしました。寝込んでいる宣教師を見つけて襲おうとしたのですが、宣教師の周りに26人の護衛がいるのを見て、彼らは勝ち目がないと思って逃げ出してしまいました。この宣教師は、町に行った時、そのならず者のひとりがけんかをして怪我をしているのを見て、その手当てをしてやりました。そのときに、そのことを聞いたのです。もちろん、宣教師には護衛などだれひとりいません。宣教師は、この不思議な出来事はきっと神の守りに違いないと確信して、神に感謝しました。

このことがあって、しばらくして宣教師は帰国して、ミシガンの自分の教会で、この話をしました。すると、ある男性が興奮して「それはいつ起きたのですか」と尋ねました。すると、その男性は、その時間をアメリカの時間に換算して、「あなたがならず者に襲われそうになつたちょうどその時間に、私たちはあなたのために祈っていました」と言いました。そして、彼は皆に向かって言いました。「その時、一緒に祈っていた人は、

皆ここに来ているはずです。立ってください」と言いました。宣教師が立ち上がった人を数えたら、なんと 26 人でした。宣教師をガードしていた 26 人の護衛の数と同じだったのです。一同は、神の超自然の守りを知って、神を賛美し、また感謝したとのことでした。

神は天の軍勢を従えておられる「万軍の主」です。聖書は、この「主」に信頼するよう、私たちを励ましています。

三、しもべである神

聖書は、神が力あるお方、主であるお方であることを教えていますが、それと同時に、神が、人々の「しもべ」となって、人々に仕えてくださるお方でもあると教えています。イザヤは、そのことを 4 つの「しもべの歌」と呼ばれる箇所で述べています。それは次の 4 箇所です。

- (1) イザヤ 42:1~9
- (2) イザヤ 49:1~6
- (3) イザヤ 50:4~9
- (4) イザヤ 52:13~53:12

これらの箇所で「しもべ」と呼ばれているのは、イスラエルの場合もあれば、預言者イザヤ自身の場合もあります。しかし、これらの預言には、「しもべ」をイスラエルやイザヤであると言って結論を出せないものがあります。それはイスラエルやイザヤ以外の「誰か」を指しています。それは「誰」なのでしょうか。

聖書で難しい箇所があるときには、「新約は旧約で、旧約は新約で理解する」というのが原則です。それに従うなら、第一の歌はマタイ 12:17-21 に引用されていて、「これは、預言者イ

ザヤを通して語られたことが成就するためであった」とあります。イザヤが預言した「しもべ」はイエスのことであると書かれています。

第二の歌に「わたしはあなたを国々の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする」（イザヤ 49:6）とありますが、シメオンが幼な子イエスを腕に抱いて「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。あなたが万民の前に備えられた救いを。異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を」（ルカ 2:29-32）と言って、イエスがイザヤの預言した「しもべ」であると言いました。

第三の歌に「打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった」（イザヤ 50:6）はイエスが十字架に架けられる前に、さんざん叩かれ、鞭打たれ、侮られ、辱められたことによって成就しています（マタイ 26:67）。

第四の歌はイエスの十字架そのものの預言です。「私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」（イザヤ 53:6）とるところを、エチオピアの役人は読んでいましたが、この「彼」とは誰のことなのかが分かりませんでした。それで、ピリポに「預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか」と尋ねました。すると、「ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝え」ました（使徒 8:24-25）。

イザヤが預言した「しもべ」は、イエスです。イエスは神の

御子であるのに、人の世に生まれ、人々に仕え、そのしもべとなつて、最後には十字架で、その命さえも獻げてくださいました。イエス・キリストこそ、私たちの罪や咎をすべて背負つて、私たちを贖つてくださる「しもべなる神」です。それが旧約と新約が教える聖書の結論です。

私たちには、力ある神、主である神が必要です。恐れを覚えるとき、弱さを感じるとき、私たちは、「全能の神」に頼り、「万軍の主」のもとに身を避けます。しかし、自分の恐れが、自分の思い煩いや不信仰から来ているとき、主である神に近づくことがはばかられることがあります。また、過去の失敗などによって心が傷ついているときなど、素直に神の前に出ることができないことがあるかもしれません。しかし、そんなときも、イエスは私たちに優しく近づいてくださいます。

「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく」（イザヤ42:3）とは、イエスの柔軟さ、優しさ、親切さを見事に表しています。「葦」は水辺に生える雑草です。そこを通る人々はそれを踏みつけても平気です。「葦」は価値のないものの代表としてとりあげられています。けれども、イエスは、人々が価値を認めない人、そんな傷んで折れそうになっている葦のような人、また、折れそうになっている人の心をも決してくじくことはなさいません。

次に、「くすぶる灯芯」とあります。灯芯は油を吸って燃えるのですが、長く燃やしていると、芯の先端が炭化して黒くなり、炎が小さくなり、くすぶり出します。「くすぶる灯芯」とは、そのようなもので、今にも消えそうな状態のものを指します。それが消えないようにするために、芯の黒くなった部分を芯剪り鋏などを使って剪り取ります。それを「燭を剪る」と

言います。神は、信仰者を暗い世の中を照らす光としてくださいました。しかし、さまざまな理由で、光を消さないまでも、くすぶってしまうことがあるものです。イエスは「くすぶっているようなものはいっそ消してしまえ」とは言われません。丁寧に芯を手入れし、もういちど、明るく輝くようにしてくださるのです。イエスは弱っている者、傷ついている者、よろける者を決してお見捨てにならず、守り助けてくださるお方です。

神は主であって、私たちはその「しもべ」です。私たちが主のしもべとなって神を信じ、頼り、その言葉を守り、従うのは当然のことです。けれども、それができないいる者たちをも、イエスは斥けず、神を信じ、神に信頼するようにと励ましてくださるのです。イエスは私たちの主であるのに、しもべとなって仕えてくださる神です。しもべである神、イエスのもとに進み行きたいと思います。

(祈り)

主なる神さま、あなたは、今にも折れそうなイスラエル、くすぶる灯芯のようなユダにも、忍耐を示されました。眞実なあなたは、ご自分の者たちが再び立ち上がり、輝きを取り戻すために、御子イエスを「しもべ」として世に送ってくださいました。「しもべである神」、イエスが私たちに仕えてくださるゆえに、私たちは、今、守られ、支えられ、あなたと人々に仕えることができる者とされました。この週も、あなたが私たちにとって「主」であり、また「しもべ」であることを深く思いながら、あなたに信頼して歩むことができますよう、助け導いてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。